中学校および高等学校体育における
競走相手との駆け引きを主題化した長距離走に関する研究

－生徒の態度の変容に着目して－

松本　佑介（広島大学大学院）

１．目的

本研究の目的は、中高生を対象に、体育授業において、競走相手との駆け引きを主題化した長距離走を実施し、その授業実践が生徒の長距離走に対する態度に及ぼす影響について、生徒の態度の変容と教師が捉える生徒の態度から検討することであった。

２．研究方法

１）対象者：中学１年生 71 名、中学３年生 66 名、高校２年生 182 名および授業担当教師３名

２）授業実践の概要：授業時数は、中学校６時間、高校３時間であり、以下の３点の指導上の工夫を行なった。①制限区間と自由区間のあるトラックの使用、②走力別のグループの編成、③昇格降格ルールの適用。

３）調査方法：長距離走に対する態度（小磯ほか，2018）および多面的競争心（太田，2010）に関する質問紙調査を単元の前後に実施し、４件法で回答させた。また、授業を担当した３名の教師を対象に、授業に対する生徒の態度に関する半構造化インタビューを行った。

４）分析方法：質問紙調査については、各因子ごとに、単元前後における平均得点の変容を、対応のある t 検定を用いて検討した。また、インタビュー調査については、SCAT（大谷，2019）を用いて分析を行った。

３．結果と考察

１）質問紙調査

「意欲」は中学１年生（t=-4.06, df=70, p<.001）と中学３年生（t=-3.08, df=66, p<.01）、「成果」は中学１年生（t=-4.74, df=70, p<.001）、「協働」は中学１年生（t=-3.65, df=70, p<.001）と高校２年生（t=-2.29, df=181, p<.05）、「好感」は中学１年生（t=-4.81, df=70, p<.001）と高校２年生（t=-4.09, df=181, p<.001）において、単元後に有意に低い値を示した。「手段型競争心」は中学１年生（t=-3.75, df=70, p<.001）と中学３年生（t=-2.97, df=66, p<.01）において、単元後に有意に高い値を示した一方、高校２年生では単元後に有意に高い値を示した（t=3.00, df=181, p<.01）。「負けず嫌い」は高校２年生（t=3.20, df=181, p<.01）において、単元後に有意に低い値を示した。「過競争心」は中学１年生（t=-2.15, df=70, p<.05）と中学３年生（t=-2.09, df=66, p<.05）において、単元後に有意に高い値を示した。

２）インタビュー調査

生徒の授業に対する態度の肯定的な側面として、【高学習意欲】、【積極的関わり合い】、【競争社会を生き抜くための資質・能力】が挙げられた。一方、否定的な側面としては、【球技と比較した場合の白熱した応援の少なさ】、【ルールによる弊害】が挙げられた。

４．結論

本研究の結果、競走相手との駆け引きを主題化した長距離走は、生徒の長距離走に対する態度に影響を及ぼすが、その影響は肯定・否定的な両側面があることが示唆された。

５．主な参考文献

小磯透・岡出美則・西嶋尚彦（2018）小中高生の体育における持久走と長距離走の態度の因子構造とその変化．発育発達研究，79：1-24.